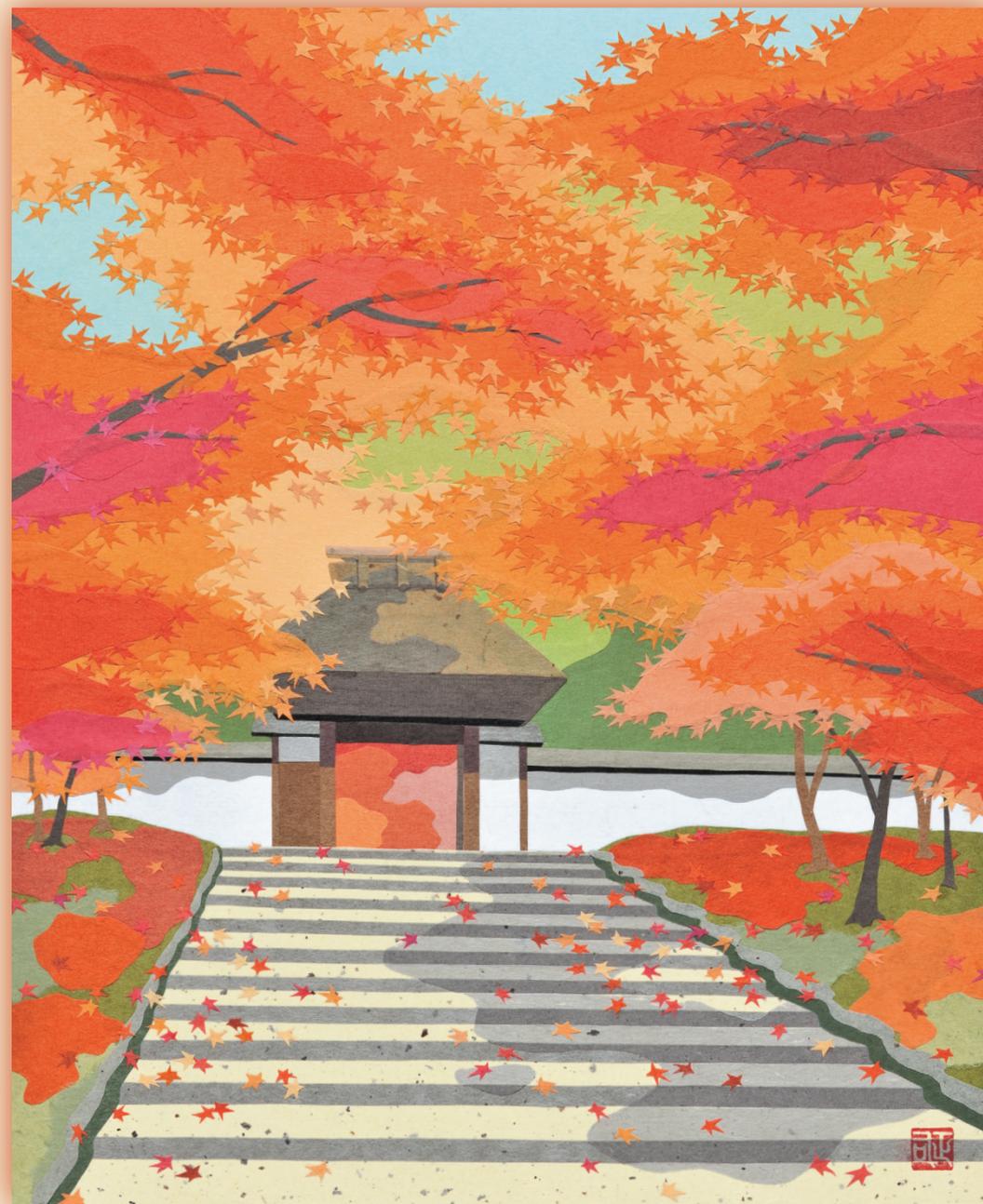




Rohm Music
Foundation
ロームミュージックファンデーション



入江正司「秋の安楽寺」(紙彩画)

京都の秋 21st AUTUMN KYOTO MUSIC FESTIVAL 音楽祭

開会記念コンサート

2017年9月17日(日) 午後2時開演 (午後1時開場) 京都コンサートホール 大ホール

第21回京都の秋 音楽祭 2017年9月17日(日)～11月26日(日)

主催：京都市／京都コンサートホール（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）
協賛：ローム株式会社 助成：平成29年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業



京都市印刷物 第294421号
発行：文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課
(平成29年9月)

京都の秋 音楽祭

開会記念コンサート

21st Autumn Kyoto Music Festival Opening Concert

プログラム Program

すぎやまこういち：序奏 MIYAKO (2016)

Koichi Sugiyama: MIYAKO - composed for the 20th anniversary of Autumn Kyoto Music Festival

ショパン：ピアノ協奏曲第2番 へ短調 op.21

Frédéric François Chopin: Piano Concerto No.2 in F minor op.21

<休憩 Intermission>

ラフマニノフ：交響曲第2番 ホ短調 op.27

Sergei Rachmaninov: Symphony No.2 in E minor op.27

【指揮】 広上淳一（京都市交響楽団常任指揮者兼ミュージック・アドバイザー）
Junichi Hirokami, Conductor (12th Chief Conductor & Music Advisor of Kyoto Symphony Orchestra)

【ピアノ】 ルーカス・ゲニューシャス Lukas Geniušas, Piano

【管弦楽】 京都市交響楽団 Kyoto Symphony Orchestra

プロフィール Profile



© Greg Sailor

● 広上 淳一（指揮） Junichi Hirokami, Conductor

東京生まれ。東京音楽大学指揮科に学び、1984年26歳で「第1回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクール」に優勝し、1986年以降、世界中のメジャーなオーケストラへ客演を展開。1991～95年ノールショピング響、1998～00年リンブルク響の各首席指揮者、1997～01年ロイヤル・リヴァプール・フィル首席客演指揮者、1991～2000年日本フィル正指揮者を歴任する傍ら、フランス国立管、ベルリン放送響、コンセルトヘボウ管、イスラエル・フィル、ウィーン響等に定期的に客演。2006～08年米国コロムビア交響楽団音楽監督、オペラの分野でも国内外で活躍し、シドニー歌劇場、新国立劇場等へ客演。2013年「第32回藤堂音楽賞」、2015年京響とともに「第46回サントリー音楽賞」受賞。東京音楽大学教授、京都市立芸術大学客員教授、2008年4月から京都市交響楽団第12代常任指揮者、2014年4月からは第12代常任指揮者兼ミュージック・アドバイザーに就任。2017年4月より札幌交響楽団友情客演指揮者。

● ルーカス・ゲニューシャス（ピアノ） Lukas Geniušas, Piano

1990年モスクワ生まれ。モスクワ音楽院の教授でもあった高名な祖母のヴェーラ・ゴルノスターエワにも学んで大きな影響を受け、ジーナ・パッカウアー国際コンクールで優勝。2010年にはショパン国際コンクール2位、15年のチャイコフスキー国際コンクールでも2位と、主要コンクールで輝かしい成績を収めている。ゲルギエフ、プレトニョフ、ソヒエフ、ラザレフ、デュトワらの指揮のもと、ハンブルク響、ロシア・ナショナル管、サンクトペテルブルク・フィル、クレメラータ・バルティカ、ワルシャワ・フィル、BBCスコティッシュ響、N響、日本フィル、シンガポール響などと共演。ラインガウ音楽祭やルール・ピアノ・フェスティバル、ロッケンハンス音楽祭などの著名音楽祭や、世界中の主要ホールで演奏している。パロクから現代曲まで探求心は尽きることがなく、レパートリーはチャイコフスキーやラフマニノフの協奏曲からヒンデミットまで極めて広大である。



© Evgenij Evtukhin

● 京都市交響楽団（管弦楽） Kyoto Symphony Orchestra

日本唯一の自治体直営オーケストラとして1956年創立。2008年4月第12代常任指揮者に広上淳一が就任。2014年4月から常任指揮者兼ミュージック・アドバイザーに広上淳一、常任首席客演指揮者に高関健、常任客演指揮者に下野竜也が就任。2015年広上淳一とともに「第46回サントリー音楽賞」受賞。同年6月広上淳一指揮のもとヨーロッパ公演で成功を収め、2016年は創立60周年記念国内ツアーと京都市内で「ふらっとコンサート」を開催し、平成28年度地域文化功労者表彰を受ける。2017年4月からは下野竜也を常任首席客演指揮者に据えて広上・高関・下野による3人指揮者体制を確立し、文化芸術都市・京都にふさわしい「世界に誇れるオーケストラ」として更なる前進を図っている。

© 伊藤菜々子

曲目解説 Program Note

♪すぎやまこういち：序奏 MIYAKO

この曲は、京都コンサートホールの「京都の秋 音楽祭」の第20回目を記念して委嘱されたものとなります。そして、京都市交響楽団創立60周年と併せて大きな意義を感じております。平安時代は文字通り都であった京都は、その後も日本文化のMIYAKOであり続けています。

曲は、力強いファンファーレで始まり、やや和風な旋律がホルンから弦楽器へと受け継がれていき、雅楽の代表とも言える越天楽のモチーフが登場。それに続いて旋律が色々な形で展開して行き、最後は雅楽的な音型で締め括っています。

すぎやまこういち

● すぎやまこういち（作曲）

東京生まれ。数多くのヒット曲やCMをはじめ幅広いジャンルの音楽を手掛けている。人気ゲームソフト「ドラゴンクエスト」の音楽を発売以来担当。青少年のオーケストラ入門になればと、オーケストラによる交響組曲「ドラゴンクエスト」のコンサートを各地で行っている。

♪ショパン：ピアノ協奏曲第2番 へ短調 op.21

「ピアノの詩人」と称されるフレデリック・ショパン(1810-49)は己の創作をほぼピアノ曲、つまり、自分の演奏で名技を示せるものに限っている(これは作曲家と演奏家がまだ分離していなかった19世紀には稀なことではない)。しかも、小さなサロンでの演奏を好んだがゆえに、自ずと独奏曲に的が絞られた。しかし、そんな彼も故国ポーランドでは協奏曲を2曲、管弦楽伴奏付きのピアノ曲を4曲も残している(1曲は出国後に完成)。このときにはまだ、大きな舞台上で華々しく活躍することを夢見ていたのだろうか。その種の作品は皆、華麗な演奏技巧を示すと共に青春の輝きを放っている。

この協奏曲第2番(出版順の名称。実際は最初の協奏曲)は3つの楽章からなる。第1楽章はへ短調のソナタ形式(提示部はまず管弦楽のみで、次いで独奏も交えて再び繰り返される)。ショパンのお手本はモーツァルトからフンメルへと連なる流儀であり、華麗な技が節度と趣味の良さを持って示される。第2楽章は変イ長調で3部形式の「夜想曲」。音楽院の同級生グワトコフスカへの思慕がピアノで(オペラのアリアのごとくに)歌われ、中間部では激情も溢れ出る。第3楽章はへ短調で(大きく見れば)3部形式に長いコーダが付く。主題には民族舞曲の趣があるものの、全体を通じてピアノが鍵盤の上を駆け巡る。ともあれ、この協奏曲と次作の第1番でショパンはそれまでの総決算を行い、故国を後にして生活と音楽の両面で新たな世界へと旅立つこととなった。

第1楽章: Maestoso

第2楽章: Larghetto

第3楽章: Allegro vivace

♪ラフマニノフ：交響曲第2番 ホ短調 op.27

20世紀を代表するピアニストの一人であり、協奏曲も含めてこの楽器のための作品が多いとはいえ、セルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)は「ピアノ音楽作家」に留まらなかった。3曲の交響曲や管弦楽曲、歌劇や歌曲などが彼の作曲家としての力量と守備範囲の広さを十二分に証している。中でも交響曲はアントン・ルビンシテインに端を発し、チャイコフスキー、タネーエフやグラズノフらへと続くロシア独自の交響曲の伝統——すなわち、音の構築性を(ドイツ流とは些か違ったかたちで)重んじつつも、土着の音楽の要素をも何らかのかたちで盛り込む流儀——に連なるものだ。

交響曲第2番は演奏時間に1時間近くを要する大作で、全4楽章からなる。第1楽章はホ短調でソナタ形式。緩やかなテンポによる長大な序奏を経て、速い主部が始まる。第2楽章はイ短調で複合3部形式のスケルツォ。主部の音楽が一旦静まったのち、中間部の開始を告げるのは強烈な一撃だ。第3楽章はイ長調で3部形式。弦の出だしに続くクラリネットの旋律はあまりに甘美。中間部では第1楽章の序奏の旋律が用いられ、音楽は次第に高まりを見せていく。第4楽章はホ長調でソナタ形式(提示部終わりで第1、3楽章が回想される)。音楽はカーニバル的喧噪と抒情的な「歌」の間を行き来しつつ、最後に後者が高らかに示されたのち、怒濤のコーダに到る。全曲の演奏時間の長さを微塵も感じさせず、聴き手を飽かさず劇的な構成はまさに一流の交響曲作家の手になるものだと言える。

第1楽章: Largo - Allegro moderato

第2楽章: Allegro molto

第3楽章: Adagio

第4楽章: Allegro vivace

大久保 賢 (音楽評論)